

平成 21 年度

事業所名 : グループホーム シリウス前沢

## 1 自己評価及び外部評価結果

### 【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0391500063		
法人名	株式会社 シリウスケアサービス		
事業所名	グループホーム シリウス前沢		
所在地	〒029-4209 岩手県奥州市前沢区あすか通四丁目8番地15		
自己評価作成日	平成 21年 1月 24 日	評価結果市町村受理日	平成 22年 5月 10日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先 <http://www2.iwate-silverz.jp/kaigosip/infomationPublic.do?JCD=0391500063&SCD=320>

### 【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会		
所在地	〒020-0021 岩手県盛岡市中央通三丁目7番30号		
訪問調査日	平成 22年 2月 9日		

### 【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

職員は認知症の主症状と周辺症状を理解し、生活歴や個々の性格や事柄の検討をする際や日々のコミュニケーションの際には念頭に入れている。共同生活として、入居者様のエンパワメントを職員の手でなくさないよう、入居者様方も共に協力しやすい環境を維持できるような日々を大切にしている。また、社会資源を活用し、地域に根ざした事業所として試行錯誤を繰り返している。

### 【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

グループホームシリウス前沢では、新たに「あたたかい助け合いで笑顔が育ちます」という独自の理念を掲げ、利用者の発するシグナルを理解し、適切な応答によって相互に共感を生む等のように、利用者とのコミュニケーションのあり方を追求したいとしている。職員は常に笑顔で応答し、言葉少ない利用者には職員の方から近づいて伺うなど、その場の状況や空気を読み取りながら対応している。また、地域に根ざした運営に努めており、夏祭りの開催を通して交流を深めるとともに、敬老会への参加等のように利用者本人が馴染みの地域での暮らしを支援している。ホームの消火訓練について近隣からの参加協力を依頼して、支援体制づくりに取り組んでいる。

## V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

【評価機関:特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会】

事業所名 : グループホーム シリウス前沢

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I.理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	介護職員の手で「あたたかい助け合いで笑顔が育ちます」という、わかりやすい理念を掲げ、日々それを実践している。	新たに「あたたかい助け合いで、笑顔が育ちます」という独自の理念を掲げ、職員は利用者と同じ目の高さで応答を返し、笑顔の絶えないケアに取り組んでいる。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	事業所行事の夏祭りや消防訓練の際は、地域の方々にも参加いただいている。近隣の保育所やコンビニ、地元の厄年連とも交流がある。	ホーム主催の夏祭りは住民協力により実施され、厄年連による出店や市内公演団体による余興があり最大イベントとなっているほか、老人クラブや保育園児の訪問、地域敬老会や特別支援学校文化祭への参加、女教師の会からの協力や寄贈を得るなど交流の輪が広がっている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	事業所独自では行っていない。地元の家族介護教室の一環で小規模施設の見学に来訪いただいた際に支援方法のアイデアとして事業所の支援方法をお伝えしている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	利用者の生活歴の情報を知人である会議出席者からいただくことがあり、利用者の更なる理解を深めサービスに生かしている。サービスの実際、評価は報告している。	活動実績報告のほか、事業所主催の行事、委員からの情報提供など、協議や交流の貴重な場となっている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	管理者は申請書類の提出等で区役所への出入りを行ない、そこで情報を得よう努めている。	遠方に住んでいる利用者家族状況や住宅のない独居利用者の生活状況についての報告や情報収集を行っている。また申請書類提出等で区役所担当者と相談協議している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	夜間は防犯上施錠しているが、それ以外の身体拘束はありえないとし、職員が勉強会をおこない理解を深め、共通認識を持っている。	身体拘束をすることはないが、拘束の5つの方針・3原則や制限11項目について学習しているほか、尊厳を支えるケアこそが介護の道に通じることの認識で研修を深めている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	同じく、ありえない事柄であるとし、職員は勉強会を通じて理解を深めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	対象となる可能性がある利用者が現時点では居らっしゃらないが、職員は勉強会を通じて理解を深めている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約に至るまでの間、不安や疑問点に対しての連絡を密に取っている。契約時には解約となる場合の条件についても説明し、またその可能性が出てきた際もあらためて説明し、相談をしていただけるようにしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者が意見、不満、苦情を表出できるよう信頼関係の構築を最優先に取り組んでいる。家族や面会者にも意見が表出しやすいよう、意見箱の設置やケアプラン更新時に意見、質問の記入をお願いしている。	ケアプラン評価記録、推進会議報告を家族へ送付する際には「意見記載用紙」を同封しているほか、毎月個別に「お便り」を発送し、暮らしの様子などを知らせている。更にはアンケートなども組み込みながらニーズの収集を図りたいとしている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月に一度職員会議を開催している。管理者は職員と共に介護業務に入り、介護現場を把握している。また職員間での報告、連絡、相談のための申し送りノートを常時活用しており、反映させている。	月例職員会議では、介護の現状や課題に対する悩みまたは改善への協議、行事計画の骨子案作りや展開に関する一人ひとりの提案や話し合いのできる場として機能している。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	勤務割の作成時に休日希望を毎月全職員に尋ね、可能な限り休日としている。事業所行事などは職員主導でおこない管理者からのトップダウンは極力控えるように工夫している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	内部研修として勉強会を開催している。基本的な意識やコミュニケーション技術などは働きながらトレーニングしていくこととし、自己トレーニングを促すため段階的に仕事量を増やすなど工夫している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	県グループホーム協会に入会しており、管理者は交流等おこなっている。また同系列のグループホームが市内と隣接町内にあり、職員は他職員との交流する機会がある。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前から可能な限り面談する機会を設け、困っていること、不安なこと、求めていることの把握と受け止める努力をしている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	上記同様、入居前から可能な限り面談する機会や電話連絡の機会を設け、困っていること、不安なこと、求めていることの把握と受け止める努力をしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	居宅ケアマネージャーを介しての入居申請が多く、各々の御事情から他サービスよりグループホーム入居が適している状態の方々の判断され申請時にお話いただいている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	利用者との談話で食事献立や行事立案している。食器拭き、テーブル拭きなど入居者様が主体の家事がある。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	医療機関への通院援助を御家族様にいただいているところが多い。また、近隣の御家族様から自宅までとれた野菜を持参いただいたり、遠方の御家族様からも果物が宅配されるなど有難い支援を受けている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	地域の敬老会や高齢者の交流行事には出席できるよう努めている。家族に関わらず利用者の友人等の面会も継続的にある。	近所の人や利用者の家族、同級生等がホームを訪れており、利用者のこれまでの人間関係が保たれている。このほか敬老会やイベントに参加することで、馴染みのある地域で交流する機会となっている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者間で自発的に関わり支え合いがなされている。入院された入居者様へお見舞いを希望されたり、利用者同士が呼びかけや助け合いをされている。呼びかけの言葉に相手が不快になる場合など職員が支援する。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	今年度は、そういった事例がないが必要に応じて相談や支援に努めている。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	信頼関係の構築の中で希望、意向の把握は常時行なう。毎日決まった時間に入浴したい希望のため時間を調整したり 通院日の変更など多岐にわたる。	相互の距離間を縮めるような関わりのもと、利用者の思いに耳を傾けるとともに、利用者のできること・できないこと等のアセスメントにより、意向や楽しみごとの把握に活かし、外出支援や食事内容等サービスに反映している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	契約時は本人、家族、市町村に加え、契約前に利用されたサービス事業所からも情報収集をしている。入居後も継続して本人、家族、失礼にならなければ友人等からも日常会話の中で生活歴の把握に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	信頼関係の構築の中で継続的に把握に努め支援に生かされている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	家族へは郵送で計画内容素案を提示し、意見を記入いただける体制をつくっている。面会時も職員全員が家族と話し合える体制をつくっている。職員はモニタリングを月に一度おこなっている。	利用者の日々の小さな気づきや変化を申し送りノートに残し、ケース検討会や月1回のモニタリングを通じて全職員が周知するとともに、介護計画に活かしている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	その日の出勤職員で各々の出勤時間内での個別記録を毎日記入する。また、それとは別に申し送りノートも活用し様々な実践に生かされている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	御家族様が遠方に居られる場合や要望や様々な都合に応じて行政への申請代行や保険証関係書類の送付先を事業所に変更申請したりといった対応をしている。		

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域のボランティア団体として複数の団体から踊りや歌の訪問をいただいております。そこで知人に再会したりしている。家族との外出も許可しており、一緒に外食をされたりする利用者もいらっしゃる。			
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居前からの、かかりつけ医の利用を基本としている。定期受診以外でも各々の医療機関には相談にのっていただいている。	受診は家族同行を原則としているが、受診後の内容把握や相談のためホームから主治医へ連絡している。医療機関との緊密な連携を図りながら、適切な医療を受けられるよう支援している。		
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	職場内に看護職はいない。かかりつけ医院では、看護師も入居者様を以前から知っている方が多く、御本人や職員などにアドバイスをしていただいている。			
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院された場合は管理者以外にも、病棟での洗濯物を引き受けることや他利用者とのお見舞い援助等で職員も頻りに医療機関に出向き、看護師等と頻りに情報交換をし関係づくりに繋がっている。			
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	契約時に医療機関において常時、治療を有する必要となった場合は退居の条件となっている。終末期ケアはハード面、マンパワー面から現状不可能である。	重度化や終末期への対応に迫られることは十分に認識しているが、現段階ではその体制作りには至っていない。今後必要となった場合には、医療機関からの指導などを視野に入れて重度化や終末期ケアの体制作りを検討していくこととしている。	やがては対応に迫られるであろうその時の最善対応について、徐々に検討されることを期待したい。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	職員は、普通救命講習を受講している。救急車の要請なども実践した職員は細かく流れを記録に残し次に繋げている。			
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	避難訓練を定期的に予定、実施し、冷静な対応と消防計画の作成、活用により方法の理解に努めている。消火訓練の際は地域に参加を依頼している。	近隣のからの応援承諾を得て消火訓練へ参加いただき、消防署員の指導の下、消火訓練等が実施されている。なお、夜間の訓練についてシミュレーションをしながら、実践的に取り組みたいとしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	職員は勉強会などを通じて認知症者である前に人間であるという意識を持ち、言葉かけや対応に反映されている。	人間の尊厳は、一人ひとりの羞恥心に関わるとの認識で、どの職員も笑顔で単純明快な話かけや利用者の声には近づいて耳を傾けるなど、自己決定しやすいよう丁寧な話かけや親切な対応をしている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	利用者が意見、不満、苦情を表出できるよう信頼関係の構築、また、その雰囲気づくりを最優先に取り組んでいる。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	生活に細かな時間割はなく、その日の希望に沿って職員が援助対応できるような体制をとっている。入浴は定まった順番等はなく、その時間帯の中で希望に沿った時間に入浴できるような体制をとっている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	理容は本人の望む店としているが、現時点で職員による散髪を望む方が多く、望まれた時に望まれた型に対応している。また、私物を職員と一緒に買い物に行くこともあり、好みを自己決定していただいている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事後の食器拭きは入居者様の日課になっている。調理も希望される場合や職員から依頼して一緒に行なうことがある。献立作成は日頃の会話の中で嗜好を把握した内容が取り込まれている。	カウンター付きの対面式キッチンで、献立は利用者の意向も取り入れており、職員も伴食しながら味付けなどの話題を織り交ぜるなど楽しい食事風景である。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	ゼロカロリー飴の購入や水分摂取を促す工夫を個別におこなっている。栄養バランスは献立作成時に工夫している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	口腔ケアに誘導が必要な利用者への誘導や支援をしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	個別に段階的におむつ使用を終了したケースもある。尿意の訴えが上手く出来ない方への観察とトイレ誘導、排泄パターンの把握と下剤の投与間隔の検討もしている。	様子観察やチェック表を基に個々の排泄パターンを把握して支援しており、オムツ使用からトイレ利用へ移行するなど排泄の自立へ向けた取り組みにより、本人の自信につながっている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	下剤だけに頼らず、水分や運動量などを把握し促している。特に朝茶や入浴後など水分補給への職員の意識は高い。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴は毎日の午後実施しており、定まった順番等はなく、その時間帯の中で希望に沿った時間に入浴できるような体制をとっている。	希望の時間や気の合った2人での入浴など、利用者の状態や意向に添うとともに、入浴に対する意欲が現れるような関わりのもとで支援している。また入浴後の保温や水分補給にも配慮されている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	全室個室であり、就寝時間も特に定めてはいない。日中も居室や畳みスペースで個々に合わせて休息や昼寝をしていただいている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬の処方時は 申し送りノート等も活用し、目的や副作用について周知し、状態観察を強化している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	食器拭きや洗濯物たたみを役割としているかた。新聞でテレビ番組のチェックをし他利用者へ教えているかた。定期的買い物や散歩をするかた、家庭菜園をするかた等いらっしゃり支援している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している。	生活に細かな時間割はなく、その日の希望に沿って職員が援助対応できるような体制をとっている。その中には戸外への散歩やドライブも含められている。事業所行事では中距離のドライブも実施している。	ホーム周辺の散歩をしながら商店に立ち寄りたり、外食や喫茶で気分転換を図ったり、季節に応じたドライブなど積極的に外出している。利用者の意向から選挙投票へ出かけたこともある。	



自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	希望を優先に考えており、現金所持されているかたもいる。各々に応じて所持金での買い物もされている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	御家族への電話を希望されるかたへ希望に沿って支援している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	強すぎる照明を当てない、天井を高くする、大きな窓を設置する、風の通りを良くするといった工夫の他に、キッチンからの御飯が炊ける匂いがすぐ届くようにといった工夫をしている。	全館床暖房の空間には、畳のコーナーもあり、対面式厨房では、食欲をそそるような話の掛け合いなど明るい雰囲気である。窓からはJRの電車や運送トラックなどの往来、遠くには山並も見え、人の動きや四季を感じることが出来る。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	畳スペース1箇所、ベンチを置いた窓辺のスペース、ソファを置いたテレビ前のスペースを設けており利用いただいている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	契約前の居室には中型のタンスとカーテンのみの設置としており、ベッドなど好みのもので持ち込ただけのようにしている。電子ピアノを持ち込んだり、自ら買い物に出かけて、物干しスタンドを購入したりされている。	心身の状態や好みに応じてベッドやマットでも使用できるよう配慮している。利用者はそれぞれ電子ピアノやテレビ、盆栽、簡易物干し竿などを持ち込むほか、壁面に作品を飾るなどしている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	個々に合わせて過剰な介助をしないよう心がけ、自立している喜びや自信を持ってもらう。おおきな混乱や失敗に繋がる場合は必要な支援を検討し実践している。		